
運命の花

佐川波瑠文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の花

【Nコード】

N3038T

【作者名】

佐川波瑠文

【あらすじ】

謎の現象にさいなまれる南千尋は、謎の男性と出会う。自身の身に起こる謎を知る彼との出会いは、彼女の運命を変える。この運命の嵐は、生まれる前から始まっていたのかも知れない。※舞台は現代風の地球です。※連載中の他作品の設定とリンクさせる予定。未読でも大丈夫です

第1話

ノイズ

「♪」

大好きなシェネイラ・グラフの曲を聞きながら、高校へ向かう。

今日は彼女のポップな曲を集めたフォルダをチョイス！それを聞いて、金曜日のダルさを追い払おうとしてたのに…。

ブツツ。ザーザー……。

「またあ？」

最近何故か、音声にノイズが混じってしまうことが多いのだ。音楽だけじゃなくって、友達との電話、DVD、テレビまでも。本当にストレス！しかも周りの人に聞くと、私がいるとかだけとか意味不明な感じなのだ。

「もお！」

音楽を聞くのを止めて、鞆にしまおうとした時だ。

「千尋っ〜！」

「わっ睦美っ!？」

睦美：田所睦美とは、2－Aで同じクラスで一番の友達。1年の頃からずっとクラスが同じなのだ。

「ビックリしたあ？」

「したした!もお朝から心臓に悪い!」

睦美は、茶目っ気があって、明るくて守ってあげたくなるような可愛い子。ふわふわなロングの巻き髪も似合ってて：本当に羨ましい。

「ふふふ。やっぱいつ見ても羨ましいなあ。身長を分けてって感じ〜!」

そう。私は睦美と全然違うタイプ。

身長は168センチの学年女子トップクラス。睦美は160センチの程よさ。私は、髪もショートだし。

これだけだと、カッコイイモデル体型って感じかも知れない。でもスカートを履いてないと、中学生：しかも男子に間違えられること多々な童顔。だから悲しいことに、モデルさんとはほど遠いのだ。ちよっとしたコンプレックスである。

「もう、本当に分けたい!まだ伸びてるしっ最悪。」

一応中身は思春期の乙女。これ以上伸びたら、彼氏になってくれる子がいなくなるよ。彼氏いないけど、やっぱ私より高い方が理想だ

もん。

「最悪なんて、私には贅沢に聞こえる。あつ再来週の文化祭期待してるからね♪」

「はあ…うん。頑張るよ。」

楽しいはずの文化祭なのに、なんだか憂鬱だ。何でかって、男装をすることになったからだ。

そもそも前に睦美やクラスの女子何人かで里子ん家に行ったときにふざけてこの高校を卒業した里子の兄ちゃんの制服を着て写真を撮ったことが間違いだった。

睦美はその写真を文化祭実行委員会に持ち込んで直談判し、私は女子にも関わらずミスターの候補者として登録されてしまったのだ。

しかも睦美は新聞部にも乗り込んで宣伝までしてて…。おかげでミスター有力候補特集号で男装写真掲載&mp;新星ペット系男子！南千尋とか書かれちゃうし。もう、恥ずかしすぎる！！！

それで、睦美に立候補取り消しを訴えたら『千尋の素晴らしさを皆に知って欲しかったんだもん。』と可愛い子ちゃんのウルルン攻撃に何も言えなくなってしまったし。

睦美は私の何の素晴らしさを言ってるのだろう。でも聞くには恐ろざるし。なぜなら睦美は恋愛もの…ノーマル、BL、GLをこよなく愛する雑食文学少女。あのめくるめく妄想の世界に私がいることは確かで、きつと大変な目にあってるはずだから。

余談だけど私のミスター立候補は、クラスの子全員グルで仕込まれたらしい。クラス展示の男女逆転喫茶でミスター&am p;ミス効果を狙って集客に繋げて、クラス展示全校一番を狙って学食半月タダチケットをゲットするためらしい。目的に手段を選ばなかった結果が、私みたい。

ちなみに今年のミスは睦美で決定っばいし。ミスターも去年と同じく奴で決まりだろう。

「おい、南、田所。そのペースで歩いてお喋りしていると、遅刻だぞ。」

噂をすれば、今年もミスターな奴、三島匠。

三島とは奴が転校してきた中2からの付き合いで、今までずっと同じクラス。家も近所だし出席番号も近いから、何かと接点が多くて割りと仲が良い。

三島は身長180センチくらいのイケメン。髪型はアシメで明るい髪色、ピアスもしていて一見不良っぽい。だけど真面目で頼れるし、学年1位の秀才。このギャップもいいらしく、モテまくりだ。私は純粹に友達として見ているが。

まあそんなんで登下校や、普段から一緒にいることが多い私は、何度も付き合ってるって勘違いされている。奴のバレンタインチョコの窓口なんて毎年だ。

「やばっ！本当に！？睦美っ急ごっ！」

「待ってよ！2人と私じゃ、歩幅違うからもつとゆっくりって早
いよ。」

こんな日がずっと続くと思ってた。

だけど周囲の気圧は急低下し始め、私の人生に嵐が訪れようとして
いた。

ノイズがその予兆：警告だったかも知れないのに、私は気が付かな
かった。

第2話 耳鳴り

「今日は授業見学に来るかも知れんが、そわそわせずにも通りしろよー！じゃっ朝のショートホームルーム終り。1時間目の準備しろよー。」

我が私立^{ほしかわ}星河高校は、ここいらでは有名な進学校である。

文理の特進クラス各1、文理の普通クラス各3の1学年8クラス編成である。

授業は帰国子女と留学生に配慮されていたり、成績を考慮した科目別にクラスを設けたりなど決めの細かい指導で有名。さらには留学制度、奨学金制度、成績優秀者に対する特典、イベントの豪華さもあり、この太っ腹なところも魅力の一つだ。

そんなこんなで、星河高校には全国から色んな教育関係者…特にその分野の偉い人が見学に来るのだ。

「ねえ、三島。偉い人、何時ぐらいに来るかな？」

隣の席の三島に聞く。

「知らねーよ。っーかそれ知ってどうすんだよ？」

三島は不機嫌そうに言う。

「だってさ、もし授業で先生に当たった時、偉い人がいると緊張す

るじゃん。知っとけば心の準備とかできるしっ!」

「馬鹿らし。南を見るって決まってねーだろ。自意識過剰だな。」

「なっ!」

そう言うのと三島は、生物の教科書を持って席を立てて行ってしまった。

ムカつくくって言っても、この年にして肝が据わり過ぎた奴に聞いたのが間違いだったか。

「千尋っ、次の生物、一緒に行こう。」

「早くしないと、予鈴鳴るよ。」

席が離れている里子と睦美が、来ていた。

「うん。ねえねえ偉い人っていつ頃来るのかなあ。」

生物室に行く準備をしながら、2人に聞く。

「さあ。でも3年の先輩たちは、一日中実力テストだから無理だし、特進文系のうちのクラスには絶対来るよね。」

とバレー部の先輩から聞いたと里子が言う。

「でもさ、いつ来ても良くない? うちらには、関係ないし。」

睦美は、気にしていない様子だ。

「睦美まで、三島みたいなこと言うしい。」

睦美や里子に緊張しすぎとかありえないとか、そんなんでミスター候補できるのとかからかわれながら、生物室に向かった。

「今からDVDを見せるからなー。寝るんじゃねーぞ。」

生物授業は先生の予定より早く終り、残り15分はDVDを見ることになった。まあつまらないの一言に尽きる。こんな時間は問題集を解くのが特進クラスの常なのだが、私はやる気がせず、ぼーっと外を見ていた。

校門から黒塗りの車が数台入ってくるのが見えた。

9月にも関わらず日差しが強い残暑の中、いかにも高級そうな車と威張るように輝いている。

車は生徒用玄関の横にある、職員と来客用玄関に横付けにされ、学校の校長や数人が出迎えの為待っているようだ。

キイイイン……。

「っ！！！！」

そんな様子を眺めていたら、いきなり耳鳴りがした。しかも耳鳴りの音は次第に大きくなり、尋常じゃないくらいの音になる。堪えきれずに、両耳を塞ぎながら机にうつ伏せた。

このままだとヤバイかも…頭割れそう。

「わっなんだ！？先生ーデッキから煙上がってる！」

その声で、耳鳴りが止んだ。クラス全体が騒いでいる。

「なんだって！？うわあっなんじゃこりゃっ！！！」

先生は予想もしない事態に慌てているようだったけど、私は耳鳴りが止んだことにホッとしていた。

「いやあビックリした！デッキがやられるなんてねえ！」

その後、生物室から退去し、思いがけない長めの休み時間を睦美と里子と過ごしていた。クラス全員さっきの話題で持ちきりだ。

「千尋く電波少女確定かもねっ。電波で遠隔操作して、器物破損みたいな。」

里子が最近言うお決まりのセリフだ。

「電波少女言うなっ！もお私のせいじゃないし。」

電波少女。

私が電話や音楽を聞いてるとノイズが必ず入る話をしたら、私が電波的なのを出しているんじゃないかってことになり、電波少女とあだ名されたのだ。

でも、デッキが壊れる前のあの耳鳴り。あれがもしかしてと思うと、気が沈む。

「千尋？どうした？里子も冗談で言ってるんだからねっ。」

私の落ち込みがわかったのか、睦美が気にかけてくれる。里子もそうそうと冗談だからと明るく笑い飛ばしてくれる。

そうだよね。気のせい、気のせい。

「静かにく授業始めるよく」

いつのまにかチャイムが鳴っていたようで、現代文の高垣先生が教室に入ってくる。

睦美も里子もその声を聞いて、私の席から撤退し自分の席に着く。

「南。」

隣の席の三島が、2人がいなくなったのを見計らったように声を掛けてきた。

「ん？」

「具合大丈夫なのか？さっき生物室で、頭押さえてたろ。」

三島はさっきの私の様子を見ていたようだ。生物の席は離れているのに…。

「大丈夫。」

私がそう言うのと三島は、納得いかない顔をする。ああは言ったけど、本調子じゃないことはバレてるようだ。

「何かあったら言えよ。」

三島は一言だけ言うと、現代文の教科書を開き授業の準備をし始めた。

三島はいつも憎まれ口を叩くけど、優しいんだよね。

そんなことを考えながら、私も現代文の授業の準備をし始めた。

「若宮様。お待ちしておりました。」

車から出ると、校長、教頭、事務長、理事長、理事会の面々が出迎えが俺を待っていた。

「暑い中ご苦労。」

「いえいえ。さっそくお茶などでも…」

校長の言葉を遮る。目的はもう決まっているからだ。

「いや。早速だが、2年の特進文系クラスを見学したい。」

やっと自身であの娘を確かめられる…。

「では、2年のA組ですね。こちらになります。」

この日をどんなに待ったか。俺は、久々に感情が高揚するのを感じた。

第3話

目眩

「この時、主人公は直子の為になぜこんなことをしたのか。これは、本文から場面が変わった部分を読むとわかります。」

現代文の授業は好きだ。しかし、今は集中できない。

「では、加藤さん。その部分はどこだと思いますか？」

やっぱり具合が悪いのだ。耳鳴りはしない分、ましだけど。でも…頭がぼおとしてきた。早く先生に言って保健室に行こう。

ガラガラガラガラ

教室のドアが開く音がして横を見る。

「っ!?!」

その前に横にいる三島の滅多に見ない驚いた顔が飛び込んでくる。

クラス中がざわつき始め、皆に遅れてドアの方を見た。

「…!!!!」

働かない頭が、覚醒する。

スーツの集団の中でも、一際目立つ男の人。

かなりの美形だ。しかも凄みのある美形。

背も高く、まさに容姿端麗と言う言葉がぴったり。黒々とした髪はオールバックにし、いかにもやり手で仕事ができそうな感じ。高級そうなネイビーのスーツをさらりと着こなしている。

もしかしたら朝言ってた偉い人だろうか。でも教育関係者にしては、周りを圧倒するような、貫禄がありすぎる。たぶん見た目からして30代前半ぐらいで、社会的には若いはずなのに：すごいオーラだ。

じっと見ていたら、そんな彼と目が合ってしまった。

顔が熱い。きっと、真っ赤になっているに違いない。こんな顔見られたくない。でも、目は逸らすことができない。

なぜなら目を逸らしたら、切れ長な鋭い目に負けてしまうような気がしたから。何でか知らないけど、負けたくなかった。

そして、ふっと彼が満足したような笑みを浮かべた。

その瞬間、彼の大人の色香が解き放たれ、私の心臓を鷲掴みにし握りつぶす。

苦しい。心臓に悪い。それぐらい、ドキドキしてしまう。

「…さん。南さん。」

「はい。」

でも、先生の声がして一気に現実に戻る。

「次に131ページから、教科書を読んでもください。」

先生の指示に従い、席を立って教科書を読み始めた。

でも、それどころじゃない。後ろにはあの集団が、あの男の人がいて気が気じゃない。

私の席は、1番後ろの席。だから、もの凄く距離が近い。ただでさえ緊張しいなのに…何の拷問だろ。

キィィン…。

また耳鳴りだ。こんな時に限って。しかも今度は目眩までする。

どうしよう。

くらくらする。

頭が割れそう。

きもちわるい。

「南さん？ みな…み…さん…。」

先生の声がどんどん遠くなる。

このままじゃ、倒れちゃ…う…。

「んんん。」

うつすらと目を開けると、誰か人がいた。

誰だろう。頭が上手く回らない中、重い瞼を持ち上げる。

目の前にはさっきの美形の男の人がいた。

「気が付いたか？」

「ん。」

低くていい声だなと思いつつ、コクンと頷いた。

「ここは…？」

「理事長室だ。それより、続きだ。」

「つづ…んっ！」

続きって何だろうと聞こうとする前に、彼の顔が近づいてきてキスをされた。

「んんんくっ！」

抵抗しようとするが、頭は彼の手によってガッチリと固定され、両の手は彼によって素早く一括りに固定されてどうすることもできない。

さらには、彼の膝の上に乗せられ横抱き状態のようだ。

「ふうんっ。」

舌を絡めとられ、彼の舌が動くたびにクチュ、クチュリと卑猥な水音を奏でる。

見知らぬ人に、こんなことをされているのに、私は彼のキスに段々と心地よさを感じていた。彼はキスが上手いのかもしれない。

私が抵抗を弱めると、彼のキスは激しさを増した。歯列や歯茎の裏まで丹念に、舌をはい回らせる。今度は体が熱くて堪らない。

激しくなったキスに、頭を支える彼の手だけでは心許なかった。だからもう自由になった手で、彼のワイシャツを握りしめて、必死に彼のキスを受け止めた。

しばらくするとリップ音を立てながら、彼の唇が離れていった。

キスの激しさを物語るように、私の名残惜しむ気持ちを表すように、彼と私の唇は銀糸を引いていた。

「んっ。はぁ。」

息が乱れてる私に対して、彼は息一つ、表情すら乱れてない。

乱れているのは、私が握りしめたワイシャツだけ。

私の顔から離れていく彼を、ぼーっと見ていた。

「零れてる。」

彼は何か見つけたように、すうっと目を細めて口元を上げる。

親指で私の口元を拭う。そのまま彼は自分の口元に持って行って、ペロリと舐めた。

「甘いな…。」

親指を口に含みながら、ニヤリと笑う。

「なっ!!」

色気を含んだその笑みに、心臓が破裂しそうになる。

今の甘くなってまさか…思わず口元を手で覆う。

そんな私の様子を見て、彼は今までで一番の笑みを浮かべた。

今度は、大人の色香にクラクラと目眩がした。

第4話

謎の男

カクン

「やっと薬が効いたか。」

千尋には睡眠薬を飲ませた。

だが効きが悪く、千尋が起きる想定外のことが起こった。だから俺の力を強めに送り、効きを強めて眠りにつかせた。

今日は仕事で時間もないし、千尋に全てを答えるには早すぎる。

「桐谷。」

「失礼します。」

桐谷を呼ぶと素早くドアを開け入ってくる。

「車を。彼女を送り、仕事へ向かう。」

桐谷に指示をし、すやすやと眠る彼女を抱きかかえ、車に向かう。

やっと会えた…俺の花。

千尋は花の中の花に間違いない。

「今すぐにも君が欲しいんだがな。」

名残惜しいが、また会おう。

ベットに眠る彼女の愛らしい唇にキスをする。

今日何度めなのかわからない、キスを。

私は、ベットの上から辺りを見回した。

「あれ、やっぱり私の部屋。なんで家にいるの？しかも昼間からっ。」

彼と理事長室にいてあんな、あんなキスをして…どうしたっけ。急に眠くなっちゃたんだよね…。

あれは、夢…？

じゃあなんで、家にいるの？ますます意味が分からなくなる。

ピピピッピピピッ

「わっ！なんで目覚まし時計が今頃鳴るの！？」

しかもいつものベットの棚じゃなくて、机の上にあるし。

目覚まし時計を止めに、机に向かった。目に入っただのは馴染みの目覚まし時計と便箋と白い名刺。

「若宮柊一。しゅーいち、わかみや。服屋のポイントカードみたい。

」

名刺はプラスチックのカードだった。

そこには、若宮柊一と漢字とローマ字で記載されてある。会社名とかは書いてなくて、金のお城みたいな紋章があった。

そして裏には、お決まりなのか携帯の番号があった。何故かマジックで書かれてあったけど。

そして便箋に目を落とすと、綺麗な字で私の名前が書いてあった。

千尋へ

体は大丈夫か。

疲れて眠ってしまったようなので、仕事に向かうついでに家まで送らせてもらった。その体じゃ、4限の体育はどうせ無理だろ？ ゆっくり休めよ。

しばらくは何もないと思うが、ノイズ音がしたらすぐ俺に知らせろ。あんな風に具合が悪くなる前にな。

また近いうちに。

P. S.

お腹が空くと思って、14時過ぎにテイクアウトを届けるようにした。だから目覚ましを14時にセットした。今度は食べ物だ。零すなよ。

「何これええ！？ 零すなとかって…もう！！！」

でも、夢じゃないんだ。そこに、なんとなく、安心する。

いや、何で安心する…？

また近いうちに…ってあんな奴もう御免でしょ！

イケメンだからって無理矢理キスしても何しても許される訳じゃないんだからっ！！！

仮にも今まで彼氏なしの私。あれは、ほぼファーストキスだったんだから。ディープキスなんかは、初めてだし。

「はあ。でも無理矢理キスした奴より、流されてキスしてしまった私がもっと嫌…。」

思い出すと、自己嫌悪の嵐に襲われる。見ず知らずの人とのキスに夢中になって、気持ちいいと思った。

それだけじゃない…。

今でもキスや彼のことを思い出すたびに、ドキドキする私って最悪。

「ああダメダメ！！ドキドキなんかしないっ！！もう、流されないっ！！！」

ため息をつきながら、制服のリボンを外しベストを脱ぐ。

「あっ…。」

脱ぎ終える瞬間、彼の移り香が鼻をくすぐる。彼らしい力強い大人な香り。

自然と胸が騒がしくなる。

「もお…さっきから何なの？ここにいないくせに…。」

ベットのの上にベストを乱暴に脱ぎ捨てる。

「しかもあのキスをした直後に寝るなんて、私は馬鹿！？恥ずかしいすぎる！！」

残りも脱いで、Tシャツとショールパンに着替える。

それが済むと同時に、インターホンの音が聞こえた。

「美味しい！ヤバイッ本当美味しい！！」

私はリビングで、玉子と蟹が入ったお粥を食べている。

テイクアウトは、無事私に届けられた。中身は温かい中華粥…玉子とアワビの2種。お惣菜はなんと、6種類。ザーサイだけじゃなく、エビチリに棒々鶏ばんばんじーまでもある。まさに私の好みにドンピシャッ！

しかも1人じゃ、食べきれない量だ。

お昼ご飯食べてないし、お腹はぺこぺこ。大好きな中華のいいにおい。

奴に罪があっても、食べ物にはない。

そんなわけで現在、パクパクとお粥を口に運んでいる。

「15時前か。体育は終わって、5限の世界史が始まったころだな。」

すっかり食べ終わって、残りは冷蔵庫にしまった。今はテレビの再放送ドラマを眺めながら、ソファーに寝そべっている。

2限で倒れて、4時間も寝てたんだ。色々あったな。

若宮柊一。本当に謎過ぎる。

お腹もいっぱいになって、落ち着いた頭で考える。

名前知ってたのかな。千尋って普通に呼んだ。初対面の場合、苗字の南が普通だし。いかにも偉い人が、初対面の女子高生を家まで送るなんてあり得ないし。ご丁寧に私の部屋に冷房かけて私を寝かせて、テイクアウトまでご馳走してくれるし。しかもリビングの冷房まで、ちゃっかり入れてくれてたし。

家には、どうやって入ったの？…私のカギを使って？

私ん家も何で知ってるの?…学校側が住所を教えたとしたら個人情報に関して甘過ぎだよ。

テレビは前に見た大好きなラブコメドラマだけど、そんな気分じゃない。

リモコンでチャンネルを変えようとした時だ。

「テレビ…。ノイズが1回も入ってない…。」

30分も見てれば、かなりのノイズが入るのに。

しばらくは何もないと思うが、ノイズ音がしたらすぐ俺に知らせろ。あんな風に具合が悪くなる前にな。

甦る便箋の彼の文字。

「なんで、私がノイズに悩まされてるのを知っているの…?しばらくは何もないってどういうこと?」

確かに体調は万全だ。いつも以上に元気なくらいだし。

彼は私の何を知っているのだろう。

いったい何者なの…?

寝よう。頭がもういっぱいいた。

今日は、寝てばかりだな。

第5話

余韻

ピンポーン…ピンポーン

「うゝん。誰？」

しつこいぐらいになるインターホンのチャイム。

ピンポーン…ピンポン、ピンポン

「わかったから。待って。」

こんな鳴らし方、家族か友達しかいない。インターホンの画面を見ると、三島がいる。

「今開けるから。」

ボタンを押して画面の三島に声を掛け、急いで玄関に行き扉を開ける。

「お姉ちゃん！」

「つつ翼!？」

飛び込んできたのは、5歳になる私の妹だ。

「金曜。翼を保育園まで迎えに行く日だろ。」

三島が、心得たように告げる。

「つてことは夕方！？すっかり忘れてたあ。」

どうやら寝すぎたようだ。

「体調が悪かったんだから、仕方ねーだろ。一応家電に掛けたけどでねーし、翼の先生には俺が言っというた。」

三島はこの先の割りと高級マンションに住んでいて、徒歩通学の私たちは登下校がほぼ毎日一緒。

月曜日と金曜日は両親の仕事の都合で翼を迎えに行かなきゃいけないんだけど、三島はいつも付いて来るのだ。保育園の先生ともすっかり顔馴染みになってるくらいだ。

「ありがとう。助かったよ。」

三島にお礼を言う。

「たっくんから聞いたよ。お姉ちゃん大丈夫？」

たっくん…これは三島のことだ。翼も他の女の子と同じで、三島が大好き。保育園に三島と迎えに行くと、はしゃいで喜ぶのだ。だから翼の迎えには三島が欠かせなくなってしまった。三島は子どもが好きみたいで、まんざらでもなさそうだ。

「うん。もう平気だよ。」

心配してくれた妹に、笑いかける。寝すぎた感はあるけど、体調はバッチリだ。

「ねえ三島。今日バイトは？」

「ある。19時からだけど。」

三島は腕時計を確認しながら、答える。

「じゃあさ、お礼…いつものことだけどご飯食べてきなよ。ちゃちやっとするからさ。」

玄関の時計を見ると、まだ17時過ぎだ。余裕だろう。

「ごち。いつも悪いな。上がるぞ。」

三島は大人っぽいんだけど、食事に誘うと年相応の可愛い笑みを浮かべる。

いつものように玄関の鍵を閉めると、靴を脱いだ。

三島の両親は、留守にしがちだ。見かねたうちの両親が、育ち盛りだし食べに来なよと誘ったのが始まり。それ以来用事やバイトがない限り、度々夕食をとにもするようになった。

三島は母さんの味付けが好みらしく、喜んで誘われる。私の味付けも母仕込みだから、同じくだ。

父にとって三島は、貴重な将棋の相手でお気に入りだ。夕食後はそんな父と、ゲームをしたがる翼とで三島の取り合いが始まるのが定番だ。母さんも可愛い、イケメン、癒されると三島がお気に入りだ。

何でかモテるんだよね〜三島は。ちなみに翼の保育園でも、人気者だ。

「南。これ。」

三島から差し出されたのは、ストラップとうさぎのマスコットが付いたカバン。

「うわっ！えっ私のカバン！？」

何で！？嘘っ！！あることに気付き、動揺してしまう。

「早退した方がいいが、カバン忘れたらしいな。中に今日の授業ノートのコピーを睦美が入れた。礼言つとけよ。」

「わかった。届けてくれてありがとう。」

ビックリしながらも、カバンを受けとる。

「手洗ってくる。翼〜手洗うぞ。」

「はい。」

いつものように三島は翼を連れて、洗面所へ消えて行った。

早速目的の物を探し、カバンの中を開ける。

中から携帯と財布。

そして、カバンと同じうさぎのマスコットが付いた鍵を見つめる。

あの人は、どうやって私ん家に入ったのよ。私は、カバンがずっと手元にあると思ってた。だからカバンから鍵を取り出して、家に入ったと思ったのに。

「南。どうした？」

呆然としている私に、手を洗い終えた三島が声を掛ける。

「あのさっ、手元に家の鍵がないときってどうやって開ける？」

手元にある鍵を、三島の前に差し出す。

「はあ？ んく普通に合鍵だろ。お前んちにも、もしものの為の合鍵ぐらい隠してあるだろ？」

「ははは。だよね、だよね。」

気の抜けた笑いしか出てこない。家には合鍵なんてないのだ。でも奴なら、鍵を勝手に開けたり、合鍵なんてお手のもんな気がする。

無駄かも知れないけど、今日から戸締まりは要チェックだ。鍵の交換もお願いしよう。

本当何者なの！？あの男は…。

「…？それより腹へった。飯食わせろ」

三島はネクタイを緩めながら、スタスタとリビングまで歩いていっ

た。

「はい。肉あんかけ玉子炒飯とお惣菜だよ。」

私はテイクアウトの残りのあわびのお粥を頂くけど、翼と三島には残り物だ。それなりに手を掛けたつもりだが、申し訳ない。

でもテイクアウトの残りの豪華なお惣菜…エビチリ、さっぱり中華風サラダ、オイスター風味の野菜炒めがあるし大丈夫だろう。

「うわぁ！炒飯美味しそう。」

翼は目を輝かせ、身を乗り出して炒飯やお惣菜を見つめる。作る側としては、嬉しい反応だ。翼はいただきますと、元気よく言うと早速炒飯に手を伸ばす。

「翼っ熱いから気を付けてねっ。あっ麦茶持ってくるの忘れた。」

美味しいと言う翼の声を聞きながら、バタバタと冷蔵庫へ向かう。

「おい。この中華どうしたんだ。」

目ざとく三島が、質問する。思わずギクツとしてしまう。

「ん？近所の人にもらったの。お裾分けだって。」

嘘言っちゃった。

でも何となくだけど、奴の話はしづらい。冷蔵庫から麦茶を出し、3人分のコップを取り出す。

「ふうん。こんな美味しい中華をお裾分けなんて、気前いいな。お前の大好きな中華の：しかも好物ばっかだし。」

ぞわぞわっと鳥肌が立つ。

もしかして奴は、私の好みまで把握してるの？

きつ気のせい…。気のせいだよね。

第6話 連絡

「んじゃ、ごちそうさま。」

三島は、靴を履く。

「えー！ たっくんもう行っちゃうの。」

翼はこの歳でもう女のようにだ。三島のズボンを引っ張り、拗ねたように言う。

「出たっ！ お決まりのセリフ！」

でも三島が帰る時に翼がいつも同じことをいうもんだから、おかしくて堪らない。

「お姉ちゃんー！！」

ぷんすかと怒られても、ぷにぷにのほっぺをさらに膨らませるもんだから可愛いくてしょうがない。

「ははは。また来るから。」

笑いながら、ポンポンと翼の頭を撫でる。

「じゃ。」

ガチャリと三島がドアを開けるが、こっちを振り替える。

「ん？」

三島は真剣な顔つきだ。見た目が不良イケメンだけあって、ちょっと恐く感じる。

「南。色々気い付けろよ。何かあったらちゃんと俺に言え。」

「えっ？う、うん？」

突然何を言い出すんだろ。意味がわからないし、三島らしくない。

「はあ。その様子じゃ大丈夫そうだな。またな。」

ボタン

ポカンとする私を見て、三島は苦笑しながら我が家を後にした。

2人だけだから、用心しろってことかな。玄関の扉の施錠されてるか確認する。20時には父さんも母さんも帰って来るから、全然大丈夫なんだけどな。

「さっ。今日の授業ノート写そっと。」

「今日の授業は、これといって問題ないって三島が言ってたけど…。

「どうだろ。」

リビングにあるテーブルに授業ノートのコピーを広げると、癖のある文字が飛び込んでくる。睦美の字だ。

睦美は本当に癖字で、可愛らしい見た目を裏切るカクカクとした大きめの豪快な字。まあ、わかりやすくていいんだけどね。ノートはいつもポイントを押さえてるし。

「現代文、数学、世界史、古文とあれ…？」

睦美の字とは違う英語の筆記体のような癖字で、生物のノートのコピーがある。

「三島だ。」

生物の時間中、私がずっと体調が悪かったと思ったのかな。授業中は大丈夫だったのに。でもありがたいな。

カバンから携帯電話を取り出し、メールを確認する。

睦美、里子と華音かおんから体調を心配するメールが来ていた。睦美にはノートのお礼も添えて、みんなに大丈夫だよと書いて返信する。三島にもお礼を書いて送信つと。

送信をした直後だ。携帯の画面に田所睦美からの着信が表示されて、迷わず取った。

「もしもーし。千尋体調どう？今電話大丈夫？」

「もう良くなったよ！ノートありがとねっ！電話も…。」

「お姉ちゃん！電話はだーめーっ！」

翼からNGが出てしまった。翼はこの後に始まるアニメに夢中なのだ。電話をしていると大きな声で笑ったりする私を知る翼は、その時間を邪魔されると踏んだようだ。

「ちょっと待ってね。」

翼にわかったと手で合図を送り、受話器をあてながらリビングを出る。そして玄関を通りすぎ、洗面所の扉を開けた。

「もしもし？大丈夫だよ。」

「今日は、倒れちゃったからビックリしたよ。でもいいなあ。」

「ご心配お掛けましたっ。でもいいなって？」

何のことだろう…？

「またまたっ！あーんな超絶美形にお姫さま抱っこされてさあ。そのまま千尋が保健室に拐われちゃって、クラス中騒然だったよ。先生や超絶美形さんに付いてきた校長なんか狼狽するし。でも、いいなっいいなあ！」

超絶美形…若宮柊一のことだ。拐われるとか…絶対脳内妄想してる

しっ。でも的を得ているような気がしなくはない。

そっか。実際は理事長室だけど、保健室に連れていかれたことになってるのか。

ちなみに教室からは、保健室より理事長室の方が近いのだ。

「いや、具合悪すぎて覚えてないし。全然良くないんだけど。」

んゝとつに良くない。あれから奴のせいで：大変な目に遭った。思い出すと顔から火が出そうだし、謎が多すぎて混乱するし。しかも、クラス中騒然とか、何て派手なことをやらかしちゃってんのさっ！

「ええゝ！？でもさっ見ず知らずの人なのに、保健室まで運んでくれたんだよ？しかもわざわざ、千尋ん家まで送ってくれたらしいじゃん。昼休み前に早退しちゃうし、よっぽど具合が悪かったんだね。」

確かにそこは感謝だ。奴のお陰か確かじゃないけれど、ノイズも耳鳴りも治ったし。

「そうだね。でも本当に覚えてないや。」

んゝ記憶もあまりない位だし、本当に具合が悪かったもんなあ。

…って。それなら、病人にあんなハードなキスすることないじゃんっ！何だかムカついてきたし。

「勿体無いゝ！あの高校生にはない大人の色気が滲み出てて、だけど仕事にはストイックそうな感じもしてさあ。そして倒れる千尋

を冷静に受け止めて、すぐさま華麗にお姫さま抱っこをする姿…。」

きゃー！！っと睦美は電話越しで、騒いでいる。

「…っ！」

その甲高い歓声に、思わず携帯電話を耳から離してしまった。

絶対脳内の妄想世界にトリップしてるし。今日は暴走気味だ。

もうあんな奴の話は勘弁。自然と顔をしかめてしまう。

嵐のように私を掻き乱した奴のことは、思い出したくない。せつかく、嵐を治めて平穏を取り戻したのに。

「むーっーみー？もう、用がないなら切るかねっ。」

再び携帯電話を耳にあてて、睦美に告げる。

「わぁー！ごめん！ごめん！実はさっ、ちょっと早いけど明日から文化祭の準備をすることになったんだ。今日はその連絡。」

私立星河高校は来週から文化祭準備期間に入る。授業は午前のみになり、午後の時間はすべて文化祭の準備時間に充てられるのだ。

その代わり前夜祭がある土曜に授業があったり、最終下校時間が18時までと制約があるんだけどね。

でも、勉強付けの日々から解放される貴重な1週間。

それに去年の素晴らしい文化祭を知る私は、楽しみで仕方がない。

私は文化祭実行委員の睦美の連絡を、ワクワクしながら聞いていた。

第7話 残像

「それじゃあ来週は、お休みさせてもらいます。すみません。でも明日は来るので!」

今日は土曜日。休日にも関わらず5時に起きて、6時からバイトをしている。バイトとは、近所のスポーツジムの室内プール清掃。土日は毎朝だいたい9時頃まで清掃をしている。

「気にしないでいいんだよ。今日も、泳いでいくの?」

バイト仲間というか、パートの清掃員のおばさん：美津子さんが聞いてきた。

私はバイトが終わると、このプールをタダで泳がせてもらっているのだ。使用できる時間は、プールがオープンする30分前の9時半までだ。

「いや、今日は泳がないんですよ。これから学校に行って、文化祭の準備なんです。」

学校には9時にクラスの皆が集合して作業を始めるんだけど、私は遅刻だ。勿論、文化祭実行委員：の睦美には昨日の電話で連絡済みだ。

こうしちゃいられない、早く行かなくちゃ。

「もう星河の文化祭の時期かぁ。来週の日曜に、私も行くからね。」

頑張りのよと、もう一人のおばさん：真奈美さんが声を掛けてくれる。

「はい。じゃっお先に失礼しますっ！」

元氣良く挨拶をして、駆け出す。

「おーい。プールサイド走んなよう。お疲れ様！」

プールを挟んで反対側にいるスイミングコースの笠間コーチが声を上げる。

「ごめんなさいっ！お先に失礼します。」

皆に声を掛けて、更衣室でジャージを制服に着替えて急いで学校に向かった。

「おっ千尋。10時前じゃん。早かったね。」

教室に入ると里子が、声を掛けてきた。

「今日はチャリだからさっ。どこまで進んだ？」

教室内に人は少ないが、みんなバタバタと動き回っている。

「色々係を決めたよ。千尋はね、準備期間は買い出し係。当日は喫茶のウェ이터。」

「了解！頑張りますっ！」

睦美と昨日の電話で話していた通りの係である。

買い出し係は、どのクラスも徒歩かチャリ通している地元っ子と相場が決まっている。やっぱりお店とかこら辺の地理に詳しくないとわからないし。

でもこの買い出し係は結構大変。生徒は都内の色んなところから通学しているから、地元っ子は各クラスに数人のみ。規模が大きい文化祭ならクラス展示もそれなりに大きいので、その買い出しを数人で担わなければならないのだ。

「ふふふ。お姫様、王様に抱かれた感想はいかなもので？」

「なっ！王様とかっ！」

確かに王子様と言うより、堂々としてだれもが平伏するような、圧倒するようなオーラがあるからな。

ちっ違うっしょ！

抱かれたとか、なんて聞き方をするんだ。それに、にやにやしすぎっ！

「あっその様子だと何かあったなあ空？」

たぶん、顔が赤くなって動揺しているのがバレバレなんだろう。

「にやにやしないっ！その前に具合はどうか聞くのが友達じゃんっ！」

薄情ものっ！病人がどんなめにあったか言いたい。でも、彼とのことはなんとなく言いづらいし。

いや、そもそも何もない。

キスは、ノーカウント。

なーんもないことにしてやる。記憶から抹殺だからね。

「あの王様に抱きかかえられれば治るでしょ。で、どうだったの？」

「具合悪すぎて覚えてません。以上。皆にも聞かれたらそう言っ
てよね。」

治るわけない。逆に熱上がったし。

覚えてたら覚えてたで、私の心臓はたぶん爆発してるし。

「えーうそっ！勿体ない！」

まったく…。里子まで睦美とおんなじことを…。

「本当に本当。私だって睦美から聞いて知ったぐらいだし。だから今日は、病み上がりの私を労ってよ？」

「はいはい。でも今日は計画立てとか、予算とか考えるみたいだから大丈夫そうだよ。」

「そっか。でも女子少くない？」

教室には、文化祭へ向けて係ごとに打ち合わせをしているが女子が少ない。

「あゝ今ね、更衣室で順番に呼ばれて喫茶用の衣装の採寸してるの。私はもう終わったからここにいるわけ。」

「千尋ー！」

声がする方を見ると、どこかに行ってたらしい睦美がいた。

「早かったね！今日は体調良さそう？」

睦美は私のそばに來ると少し心配そうに伺ってくる。

「ばあああっちり！」

私は少し大げさに伝ええると、睦美はいつものように可愛らしい笑顔を浮かべた。

「睦美。もしかして千尋の採寸？」

「そう。里子から大体聞いた？」

「うん。聞いたよ。」

そんなやり取りをした後、私は採寸が行われている女子更衣室に向かった。

「あのさっ。何で私だけ、制服脱がなきゃいけないの!？」

他の採寸してる女子は、制服の上から計ってるし。

私と言えば、ブラにパンツ一丁なんですけど。

「千尋は男の制服着るから、胸につけるサポーターとかを作らなきゃいけないの。」

「ほっ本格的いゝ。ははは。」

気合い入れすぎじゃないか、睦美。

「何言ってるの!？狙うは優勝のみ。ガチなんだから!」

ふんつと鼻を鳴らしそうなくらい、息巻いている。ドラゴン? いやミニドラゴンか。睦美って、見た目に反して熱血なんだよね。

「それに千尋はウェイターだからね。頑張ってミスターベスト3にランクしてよ? 店の売り上げに関わるから。」

「そう。ちょっと静かにしてね。」

そしてバンザイしてと言いながら、メジャー片手に採寸し始めるのは華音。

華音も仲の良いクラスメイトの一人だ。と言うより星河は女子少ないから、クラスの女子皆と仲が良いかな。

「にしてもスタイルいいよね。どうしたら、こんな風になるの。」

睦美が羨ましそうに見上げるが、私は見上げる側になりたいよ。

「単に背が高いだけでしょ。睦美のが、女の子らしくて羨ましいよ。」

「私もそう思う。腰の位置が高いし、足の長さ…特に膝下長い。髪も瞳も色素も薄いし、外人みたい。血管も透けて見えるね。」

「言い過ぎ。止めてよ。混じりつけなしの純国産だから。むしろこの童顔だとアンバランスだし。」

顔が良ければモデルさんみたいとか言われるのになあ。

神様は、身長しかくれなかった。そもそも家族の中でも私だけ背がある気がする。

「わかってないって怖いね、華音。」

「そうだね。鈍いって、ここまでくるとすごいよ。」

「ちょっと、馬鹿にしないでよ。とにかく、アンバランスなところはコンプレックスなんで刺激しないで！」

わかってないのは、2人だ。1回私になってみれば、わかる。

そんな2人はおざなりに頷きながら、採寸を再開する。

外人か。

そう言えば若宮って人も、背が高くて足も長かった。顔整ってるし、なんかハーフに見えなくもなかったな。

また会おう。

ドキン

嫌だ、何思い出してドキドキしてるの？

会えるって期待してるの？

まさかっ！ありえないから。

仮にも初対面の病人を襲った変態だよ。もう抹殺すべきことなのに。

なのに、心にこびりついて消えない。

昨日だって何度も忘れようとしたのに、時間が経つにつれて逆に心に彼が焼き付けられるよう。

「はい、もう採寸終わったよ。胸もあるから潰すより、胸板あるように見せた方がいいかなあ。」

「え！？ありがとう。」

突然話しかけられて、ビックリした。

いつのまにやら終わったらしく、華音は紙に色々書き込んでいる。

「あれえ顔赤いよ？さては、昨日の超絶美形のこと！？」

「ちがつ！んなわけないじゃん。」

当たってるし。

彼のこと考えちゃう自分が嫌だ。

思考が全部彼に持ってかれそう。こんなことに振り回されたくない。

早く記憶から抹殺だ。

でもみんなこんな騒ぐくらいだし、凄いインパクトあったからかな。濃厚接触した私は仕方ないのかも知れない。

「本当に！？私もそれ聞きたかった！」

華音がノリノリで聞いてくる。お願いだから、止めてよ。彼のことに触れられるだけで、ざわざわして落ち着かないから。

「それがさあ。なあんにも覚えてないんだって。ありえないよね？」

「ありえない。あんなイケメンに関わることなんて、一生ないのにい！」

「もう止めてよっ！実行委員さんに衣装係さん。無駄話してたら、準備はかからないから。」

アイツの話に花を咲かせる2人を現実世界に引き戻した。

「無駄話じゃないのにねっ。睦美。」

「ねえ。千尋怖い。」

プチッと怒りを込めたのに、2人はどこ吹く風だ。全然私のことなんか、お構い無し。

本当にこの乙女2人組は厄介だ。

「でも、運命の出会いだったよね。漫画みたいな感じだった。」

何気なく言った華音の言葉に、ドキリとした。

何故だろう。なんだか、嫌な感じだ。

漫画だから、現実のことじゃない。

だから、この先は漫画みたいに続かないと思ったら。すごく、胸がぎゅっとなった。何かを埋めたいのに、埋められない。

けれど、彼とはまた会ってしまうことになる。

私は、あんなところでまた会うなんて思ってもいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3038t/>

運命の花

2011年7月4日14時11分発行